

紹介

R・ペルヌー著
橋口倫介訳

『テンプル騎士団』

本書の表題であるテンプル騎士団については、邦語文献に乏しく、以前は訳者橋口倫介氏に二著を見るのみであった。最近相次いで二冊の新刊が出され、そのいずれもが一般読者にも接し易い新書版であることは、従来この分野に興味を持たれることが少なかった我国にあつては、非常に喜ばしいことである。一冊は昨年末に出た篠田雄次郎著『聖堂騎士団』（中公新書）であるが、これについては別稿（『史林』六〇巻三号）でも紹介した如く、必ずしも問題がない訳ではなく、それに踵を接する形で本書が出されたことは、甚だ時宜を得たものであると思われる。

章別構成は、第一章 テンプル騎士団の起原、第二章 組織と日常生活、第三章 建築、第四章 その偉功、第五章 行政家と銀行家、第六章 テンプル騎士団事件——逮捕と訴訟——、第七章 後世の毀誉

褒貶、からなっており、この構成自身は本主題に関する研究書の一般的傾向に沿っているように思われるが、建築に関して一章を設けているのは他の邦語文献に見られぬ特色である。そして、その章の中では、ジゾル城に関して、「全く歴史的根拠のない非常識な作り話が生まれていた」（四七頁）と簡単に片付けていることなど、篠田氏上掲書と比べる時、興味深い。

著者についての紹介は「訳者まえがき」に譲るが、そこにも述べられている如く、国立文書館の古文書学者として、諸史料を駆使したその実証的厳正さは高く評価し得る。史料に直接語らせる形で論述を進めて行くやり方は読者に安心感を与え、しかも騎士の日常生活や軍事行動の描写等には生彩があり、臨場感を伴う。一方で、叙述が興味本位に流れることには厳しく注意が払われており、こうした小冊子で読み物としての面白さと調和させる一つの好例と言える。従来神話や伝説に対する態度も明快である。

訳者橋口氏には騎士団やそれと関係の深い十字軍に関する多くの著書・訳書があり、現在得ることができる最適任の翻訳者であり

ることは言うまでもない。訳文はよくこなれていて読み易く、訳注も行き届いている。ただ、第四章の注8で、ペラギウス枢機卿をコンスタンチノープル総大司教としているが、彼は同地で教皇特使として働いたことはあっても、総大司教にはなっていないのではないだろうか（これについては、御本人に確認した所、再版の機会に訂正されるそうである）。固有名詞の表記や訳語等も概ね妥当であり、本シリーズに限っても、グルッセ『十字軍』、モリソン『十字軍の研究』と経るに従い、ほぼ確立したようである。今後、本書の用語法は、騎士団や十字軍の研究に際して一つの手本になるのではないかと思われる。

（新書判 一七一頁 一九七七年三月
白水社 五五〇円）
（八塚春見 京都大学大学院生）

金子晴勇著

『宗教改革の精神』

——ルターとエラスムスとの対決——

本書はエラスムスとルターとの自由意志をめぐる論争を扱った、我が国で最初の文献である。宗教改革は「エラスムスが卵を